



若手爆笑街道を探る!



次の一発が棲む劇場。

ダウンタウンのまっちゃん、久々に大阪でライブをやった時「まっちゃん相変わらずおもろいわ。」とつくづく思った。そっか「相変わらず」彼はおもしろいのである。お笑いを探し続け、ほぼ天下を取ったともいえる現在と二丁目に出ていた頃とその「面白さ」の本質は基本的に変わっていない。ただ圧倒的に彼を、また彼の笑いを支持する数が違っているだけのことだ。今こそ誰もが評価するが、10年前は藤本義一に「ぼろかす言われていた。だがその当時から誰が見ても彼らが特別のコンビであったことも確かだ。何十年に一組の逸材と言われたダウンタウンにしてもそうである。いつでも「この頃の若手は」と言われてしまうのが若手だが、彼らが出てこなければお笑いの未来もまたない。ベテランがおもしろいのはよく分かってる。だが新しい笑いが気になるのである。若手芸人の多くを輩出した二丁目劇場は今どうなっているのか。新しいお笑いは果たしてそこにあるのか。

取材・文/端井 由紀子
撮影/ハリーズ・アイ
協力/吉本興業・二丁目劇場



床並「緊張しいなんて審査とかされると弱いです。」

徳富「相方撫で肩なんて。はっぴとか着るととんとん落っこちてくるんです。」

トクトミ・トコナミ

徳富も床並も昭和48年生まれのNSC11期生。コンビ名は「飲んでる時コンビ名の話しとったら急に千原のジュニアさんが入ってきて」「カタカナにしたらシブいぞ」と言われて、それでいっこかえて。」
第24回NHK上方漫才コンテスト優秀賞受賞。



10月14日金曜。二丁目前にすでにたむろしている制服姿の少女達の横を擦り抜け、屋上の稽古部屋をお借りして撮影とインタビューの準備をする。「取材は何組すんの?」とカメラマンのハリーさんが聞くので「9組全部。」と答えたら「全部。」とちよつとひいていた。そういえば取材を申し込んだ時、二丁目の支配人にも「ほんまに9組も載せはるんのですか?」と少し心配そうにいわれたが、そうこうしているうちに、おらずとトクトミトコナミの二人が姿を現す。近くで見ると徳富の目は本当に大きくて吸い込まれそうである。少年のような床並と並ぶと見た目にはとても22才には見えなくましてや漫才などしそうな二人だが、会話を始めると徳富のあのなんか悪いとちよつとかと思わずよつと魔性の抑揚と間が醸し出す「まともでなさ」に、彼らがこの世界

の住人であることを思い知らされる。いきなり「おねえさんおいくつですか?」と聞いてくる徳富に女の肌の曲がり角は17、とととされる。ほつといてくれ。「あれは宮沢リえを助けたくつてやったんじゃないか、っていう話があった。もしほんまやったら、すごいオッサンやなあ、つていう。」麻痺した顔面を晒して会見たヒートたけしの話をしたらジュニアはそう言っていた。千原兄弟は、天然素材のメンバーが抜けた後のちよつと過渡期にあたる今の二丁目では、確実に頭一つ抜けているコンビだ。お会いするのは二度目なのだが、お笑い芸人の誰もが気安いお兄ちゃんだと思つたら大間違いなのを毎回実感させてくれる。彼らは気安くないし話を使って繋ぐような会話もしない、が食指が動く質問には臆舌に答える。もちろんこれが素



博多「売れてる人って楽しそうじゃないですか。あれができたらええな。」
北田「僕はあんまり使いやすいタレントになりたくないんです。」
島津江「僕ね客の呼べるタレントになってお好きのチェーン店やりたいんです。」
福田「いやもう、そこで働かせてもらいます。」

電車道

島津江「10秒の一発ギャグの彼の(福田)ネタ飛んだんです。博多「10秒のネタやのに僕ら練習もしたんですよ。」福田「気持ち良くなってしまってます。」北田「でもあの時誰のせいにもでんかかったな。」第14回ABCお笑い新人グランプリ審査員特別賞受賞。NSC10期生。



兄「見にきてくれる男の子が元氣ないの氣になりますわ。」

ジュニア「この間飲んでて気付いたら小学校のプールで泳いでました。」

千原兄弟

NSC 8期生の実の兄弟コンビ。「旅行に行きたいじゃないですか。」と兄。「自分達のライブのツアーをしようと思って。」というジュニアは「この頃誰かを幸せにしているヨロコビを感じるようになった。」という。第15回ABCお笑い新人グランプリ優秀新人賞、第29回上方漫才大賞新人賞受賞。



顔でないにしても、しゃべくりでなく発想で笑かせて若手激戦区から浮上してきた千原らしいスタンスとも思える。なんといつてもまぐれな少女達のワーキヤーに酔って失速した芸人は数多い。自分達が本当の、より多くのファンを掴んでプレイクできるかどうか、今が実に頑張りとどきであることは彼らが一番よくわかっていることだろう。深夜に放映された「千原テレビ」の観客を男のみに限ったのも「あれは深夜に女の子がキヤーカーいうとつたら、男はチャネル変えよ多めでなあって。男が入ってたら女の子も見えてくれるし男も見るやろと。」という彼らなりの計算という。さらにジュニアはFM大阪でスタートしたばかりの「2丁目GANG」一度目の放送を「あれは全然おもしろい。」と言い捨て、自分の笑いのツボへの容赦のないこだわりを見せる。取材後のライブでは、そんな彼らのネタが見たかったがここの年程二丁目では「パカトク」と称するトークをしているらしく、ネタが見れなかったのが少々残念だ。

電車道はメンバーが4人のせいかやはり話す量も2倍だ、と思っただけがテープをおこしてみたらほとんどが島津江と北田の声だった。リーダーは誰が?と聞くと「誰や思いました?」と北田がからんでくる。マチャアキを敬愛する北田は歌手にもなりたいたいそうだ。「この世界のええも悪いも売れてみんとわからん。」と一番シビアな博多がやはりリーダーで、ネタがよく飛ばすという福田は「すころくのように、この先電車道がどうなっていくか楽しみ」にしているのだと島津江が教えて

くれた。一期上のナイナイの矢部がペンツを買ったという話に「売れると単価上がる仕事増えるで倍々ゲームらしいですわ。」と口々にいう彼らはやはり本気で一発を夢見る目をしていた。

10月10日月曜・祝日。今日お会いするのは偶然みんなNSCの11期生ばかりだ。ほとんどが昭和47、48年生まれで若い。LaLaLaなど最近の芸人ではこんなかわいのかえ?と思うほどのさわやかさんである。聞けば田村の方は「もうやめようと思ってました、NSCの時に。いや、受けないから。(自分達は)面白くないんだと思って。オーディション受けてもうからへんし、ネタ見せてもおもしろくない言われるし。」ところが「その時に二丁目のワチャチャ・ジュニアが始まって、そこで初めてお客さんの前でやったら、あ、客には受けるなというんでこれはやろ」と、運良く、と言うが二人の嫌味のないキャラクターから言っただけでファンがつくのはよくわかる気がした。そんな自分達のキャラクターが武器になることを知ってか大北は「ダウンタウンよりとんねるず」という。「おもしろさかて言ったらダウンタウンとは思ってすけど、あんなPK合戦みたいな好きなことして視聴率取るのとかがってすこいじゃないですか。ああいう存在になりたい。だからもっとタレント性欲しいです。」とも。「東京行きたいです。」とは言うが「でも大阪で成功しないことには、東京では全然通じないですから。」と二人とも案外クールだ。当たり前か、この世界がどん



NSC 11期生。田村「21になつてね、ウソもろしたとあるんです。その日オーバーオールでね、降ろすタイミング間違えてしもてプリブリックと。あれね、止まらへんのですよ、びっくりしたあ。その後ノーパンで風呂行きました。」

LaLaLa

田村「この世界に入って良かったことは、僕はもうテレビに出れるってことです。」

大北「誰が見てもオーラ出てるみたいになりたいです。」



礼「痩せなあかんのですけど。またそれぞれの気がないですからね。」



剛「10年くらいたって元れとったら九州に家建てたいです。」

中川家

NSC11期生。ネタは兄が考えるという。剛「こんにちは。寒いね。そうやね。」まで考えて書きますからね。もう「え？で首を横に向ける」そこまで。こいつなんにも考えてないですから。」礼「二「そのかわり突破的なんはまかしなはれ。」



なに激戦か彼らにとっては毎日が現実なのだから。

千原同様中川家も本場の兄弟コンビである。よくある話だが彼らもそうで兄に見える方が弟で、いかにも弟っぽいのが兄である。あんまり言われるので弟の礼二は「最近嘘ついて本当は34で下の子が幼稚園入った（笑）」とか言ってますねん。

子供熱出したから早よ帰らなとか。ずっと好きだったがあんまりがつかないところへ「兄貴に誘われて」NSCへ入ったのだという。誘った兄の剛は、同期がみんな年下なのでよけいに感じるのだろうか「みんな若いですからね。」それまでの数年間がもったいなかった、という焦燥感を今だに感じるという。ダイマル・ラケットを目標し、目標にNGKのトリを挙げる彼らは、二丁目には珍しい本格的漫才師志願でもある。「ほんまに好きやっ

たから。この世界に今いれてる、ということ自体悦びですわ。」そんな彼らの真撃さけけつこう胸に染みるものがある。

舞台の時間が迫ってきたので、一旦切り上げて劇場へ向かう。今日は11期生ばかりということ、最後にコーナーがあり、来ている少女達に氣を使いながらも止まらない下ネタに大笑いして再び屋上へ。舞台を終えたばかりの松口VS小林に取材と撮影をお願いする。

「何やってもファンが喜ぶ猪木のカリスマ性が欲しいんつすよ。」となぜかいつも芝居みたいな口調で話す小林に、4才の時自分の家を燃やしてしまったという強烈な幼児体験を持ち寺山修司に傾倒している松口は意外性のコンビだ。出

しゃばなしの小林のパワーを淡々と受け流す松口。妙な具

合にとられたフランスの取り方で笑いが弾んでいく。「でも僕らまだまだためなんです、二人の息が。それをクリアして、後お金があれば無敵のような気がするんですけどね。」と小林。松口が隣で大きく頷く。「全くその通りです。」

10月12日水曜。てっきりおっさん願と思っていたのに、お会いしたスミス夫人の松村はほっぺつるつるの普通の男の子であった。初対面の人が苦手なのかしやべり方もまるで恥ずかしがり屋さんのようで「将来は手塚治虫全集300冊集めたいです。」と小声で言ったりする。だが取材後の舞台では彼はやっぱりおっさんになって

いた。正反対に瀧儀は本当に芸人素質だ。「タモリ倶楽部みたいなほんまに好きでやってる深夜番組やりたいです。シテイーボイスさんとかも好きです。司会とかしても、あの人の年になってもちゃん

とコントやってるでしょう。それですよ。それってばりです。」と思うんですや。」今の課題であります。「もうちょっと真剣になること」と松村が言うと瀧儀がかぶせるように「そうなんですよ。」と言う。「この間のイベントの時も僕なんかもう腹立

つてきてね。当日やのにこいつ屋まで寝てるんですよ楽屋で。それにこれは僕なりの意見ですけど、イベントで歌とかトークとかは違うと思うんですよ。作ったものをネタを見せるもので、それを今やらなきゃだめ、というのがあって。二丁目では通用しないトークやってもしょうがない。与えられたチャ

ンスをとれただけ生かせるかですか。客はそのまま見てまうでしよ。」なかなか骨のある意

意

意



松口VS小林

NSC11期生。プロレスラーになりたかったという小林は「芸人になって良かったと思うのはやっぱり女の子と知合うチャンスが増えたこと」と臆面もなく言う。小林「相方僕に家教えくれないうです。」谷口「知ってるやん。」小林「独自に調べたんです。」



小林「この世界でいけるなとはまだ思ってます。」

松口「この世界に入るまで物書きになりましたかったんです。」



スミス夫人

NSC 8期生。灘儀「小学生の頃からの知り合いだったんです。まあ、誘ったというかムリヤリですけど。書類で応募する時こいつの分も僕が書いて送ったんです。」松村「訴えたら捕まります。」そんな灘儀に流されるまま、気付いたらもう5年という。

灘儀「僕映画も作りたいんです。」



松村「こいつのいいところは動物好きなどころですね。」



ケン「10分のネタ完成させようと思ったら、そら一年も二年もかかりますよ。」

アキ「僕ブルース・リー目指してたんです。今でも思ってますけどね。」

水玉れっふう隊

見である。それなのに言い終わったのを見計らって松村がぼそつと言ふ。「ちよつと、今の話長かったですね。」

やすきよを目指していることもあってか、矢野・兵頭の矢野はやすし師匠に似ている。舞台上で漫才している時は特にそうで、しゃべり方から首の傾け方、手の動きまでもうそっくりである。「基本的に肩書きは漫才師。タレントやない。」という矢野は自分でも競争心むき出しのところがあるという。「僕の手綱を握ってくれるのは相方しかない」と兵頭に全面的な信頼を寄せる。ネタは兵頭が考えるというがノイローゼ体質の彼は詰まると辞めることまで考えるらしい。しかも体調を崩しやすいのは腎臓の一個を五百万で売ったからという。「でもパチンコで全部負けてしまいました。」俺らの話どこまでがほんまなん?」NSCでコンビ組んだとくぐらいついで、「二人ともネタやってくれてどうもありがとう。」

然素人状態から二丁目フレッツシュリーグに参加。優勝してこの世界に入ったという。取材中「アキはかっこつけすぎやな。彼は自分の世界を作るんですよ。」とケンに言われてちよつとむつとするアキ。「それがええとこなんかもしれんけど。」どないやねん。「けんかしないで下さい。」ネタではよくしますよ。「それはどのコンビにも一番共通していた答えだ。「ネタは必死ですからね、やっばり。」ああ、みんなほんまものお笑いの神様の子供達である。」

年一度の募集だったNSCが、今年から2度になるといふ。若手芸人の世界はいよいよ激戦区である。これが就職だとしたらものすごい競争率だ。一度の募集で集まる千人から240人程が入って一年後に20人も残れない会社など他にあるかえ?それも激戦のトーナメントを勝ち抜いて上がってくるのである。二丁目に出るだけでも大変だがそこからをもっと大変で、笑いという魔物と向き合った若手達は、自分達のおもちゃだけを武器に爆笑を取りにいふ。その中から夢に見た一発を当てるのは誰なのか、二丁目に棲むお笑いの神様を大爆笑させた時次のブレイクがまたやってくる。

兵頭「家に差し押えがきた時、口に赤紙貼って担保にしてくれ言いました。」



矢野「売れたら時間なくなりますからね、今のうちに歯とか直しておかないと。」

矢野・兵頭

嫌いなヤツにはけんか売っていくという矢野。「僕が売っても矢野・兵頭がつて言われますから相方は我慢してと思います。」はい、我慢します。」第14回ABCお笑い新人グランプリ優秀新人賞、第23回NHK上方漫才コンテスト優秀賞。NSC9期生。



初舞台はH4年二丁目フレッツシュリーグ。彼らは高校の時の友人同士という。「お笑いはお笑いでキープしてちよつとプライベートな時間とか削って違うこともやっていきたい。」というアキ。ケン「僕は、もうちよつと歌の練習します。」アキ「おい、歌ってる場合か。」





スタッフも心なしか、リラックスしながら収録を見守る。これもお笑い番組ならではの空気かも。



副調整室から本番モニターを見るスタッフ。コチラもリラックス。

11:00	11:15	11:30	11:45	12:00
12:00	12:15	12:30	12:45	13:00
13:00	13:15	13:30	13:45	14:00
14:00	14:15	14:30	14:45	15:00
15:00	15:15	15:30	15:45	16:00
16:00	16:15	16:30	16:45	17:00
17:00	17:15	17:30	17:45	18:00
18:00	18:15	18:30	18:45	19:00
19:00	19:15	19:30	19:45	20:00
20:00	20:15	20:30	20:45	21:00
21:00	21:15	21:30	21:45	22:00
22:00	22:15	22:30	22:45	23:00
23:00	23:15	23:30	23:45	24:00

トリから本番まで、ピシリと進行予定が書かれたスケジュール表。収録は1日2本録りが基本。

メイン司会の3人の楽屋。やはり、売れっ子芸人とあって、本番前はあまり姿を見かけなかった。



女子大生に進行指導をするA.D.



本番終了と同時に、楽屋へ戻る若手芸人たち。皆、ちょっとお疲れ気味。



途中休憩で、メイクを直してもらおうしましませんがの藤井。

は、千原・兄がスタッフとレクラの話をしたり、カメラをのぞいては遊んでいるそこへこの日の素人女性、25人の女子大生が30分遅れてリハールに入る。彼女らにもテレビ出演するという、緊張した空気は感じられない。スタッフの話によると、いつもならここで女子大生を物色!?に若手がスタジオをわざわざ見にくるそうだが、この日は千原兄のみ。久保田利伸にちょっと似たA.D.が女子大生に進行の指導をし、リハ終了。そして、いよいよ芸人たちがスタジオへスタンバイ。さすがにこの時ばかりは、女子大生からキヤーという悲鳴が上がリ、高揚した雰囲気となる。メイン司会の圭・修、ホンコンが登場し、13時45分、予定より30分遅れて、いよいよ本番と思いきや「笑いの剣」とタイトル名を叫ぶ声が合わずNG。2度目で揃い、いよいよ本番開始。25人の女性にアンケートを軸に、芸人たちのトークが始まる。ちなみに、この日の録りのテーマは「女」とはいえ、肝心の若手はいえは女子大生以上にしゃべらない。前列のテーブルに座っている何人かは、多少口をはさむものの、それも数えるほど。ほとんどが聞き役、ギャラリイのように感じたのは、テレビではないうるが、お馴染みサッポロのオリジナルCMのコナー



少ないしゃべり。収録中一言も発しない若手がほとんどだ。が、逆に考えればこの状況の中でいかにして自分を売り込んでいくかが生き残る者とならない者の別れ道なのかも知れない。今後、番組ではコナー数も増え、さらにパワーアップする予定とのこと。彼らの持つ可能性を活かした展開に大いに期待したいところだ。

素顔をだせるよううとの理由に基づいてという。しかし、単発のVTRコーナーをのぞき、スタジオでの収録の現場で若手の個性が活かされていたかといえは、素直に首を縦にふれない。司会の先輩達のしゃべりに、限

ここで若干の休憩が入り、2丁目なんでも口ケ大作戦のコーナーへと続く。VTRが終わり、メイン司会、清水圭の本告知CMが入り、エンディング15時30分、第一回分(10月24日放送分)の収録が無事終了。

生の収録現場を見て、実際感じたのは今やブームとなりつつある、若手芸人の一大集結番組ゆえ、もっと緊迫したムードがあるのかと思っていたのが予想外に和やかムードであったことだ。スタッフの弁では「番組内容が変わってからは、皆、わりとのんびりしてます」とのことらしいが、そもそも内容変更の意図は、ファン層の拡大をはじめ、それぞれの若手が自分たちの素顔をだせるよううとの理由に基づいてという。しかし、単発のVTRコーナーをのぞき、スタジオでの収録の現場で若手の個性が活かされていたかといえは、素直に首を縦にふれない。司会の先輩達のしゃべりに、限



若手爆笑街道を探る!

仕掛人に聞く、若手芸人の現在と未来。

よりシビアなお笑い創造主。

明日さえわからぬ世界に無防備に、そして勇気を持って飛び込んできた若手芸人たちが、

その彼らと間近で接しながら、

また彼らを世に送り出す影のスタッフたちこそ、

明日のお笑いをつくっているのだ。

文句なし

におもしろい芸人がいたとしても、それを発掘し、おもしろいもの

をよりおもしろく見せるステージを用意する人がいなければ、なんの意味もない。その舞台をつくり世に送り出すのが裏で働くプロデューサーやまた支配人だ。今のこのブームも、当然、彼らの力なしには起こり得なかつたろう。常にブームの火付け役であり、新しい風を世間に送り込む。一般市民ほど口うるさい批評家はいないが、それ以上に、より身近にお笑いに接し、シビアにお笑いを見つめている彼らこそ、笑いの創造主であり、より辛口の批評家であるといえるのではないか。



樋上辰彦氏

若手の登龍門、2丁目劇場支配人。何十組という若手を間近で見守りながら、その育成に全力を注ぐ。

何もわからない世界にとびこんでくる勇氣。僕らには決してマネのできないことだね。

「笑いの剣」という番組は、そもそもスポンサーのサッポロビールが関西でのイメージづけを強くなるため、大阪的で20、30代向けの元気な番組をつくりたいとの主旨で始まった番組なんです。そこで、今、一番元気な芸人をということになって、2丁目の若手を起用したわけです。実際、2丁目の若手のファン層といえは10代が中心で、テレビのブームにまで至っていないという課題が残っていましたから、もちろん苦戦は覚悟(笑)していました。

僕自身、一緒に仕事をしていて、若手の子たちに感じるのは、わりあい、みんな普通の人とおなじ感覚をもっているなということ。あまり、情熱を表にださないというか。ま、言い方を変えれば、どんな時も自分のスタイルを守り、

ブームと呼ぶにはまだ早い。

これから本場のブームが始まります。

2丁目ブームとか巷では、いわれてますけど。僕はまだブームと呼べるまでにはいつてないと思います。これからが本番じゃないでしょうか。言ってみれば、今はふるいにかけられている時点で、この後、どれだけの若手が生き残れるか、そして、そんな生き残り組がブームをつくるんじゃないでしょうか。今、現在2丁目だけでも、約40組近

あせてないということですね。そういうところが、今の10代にウケている一因でもあるんじゃないでしょうか。それプラス、女の子たちの自分たちのアイドルを見つけたんだという探求心が今の人気に火をつけたんだと思います。手垢のついた表現ですがいわゆる大阪のジャニーズ的なノリでもないですか。

今のこの一種、ブーム的な傾向がいつまで続くかは見当もつきませんが、あえてテレビ側の人間からいわせてもらうと、テレビでは、一回ネタをやれば、それが日本中に知れ渡るわけですから、同じネタを同じ処理の仕方をしては、飽きられるでしょう。そのためには、日頃の情報力や好奇心が必要となってくると思います。テレビの世界に関するならば、彼らはまだまだ無名ですから、あせらずにそのあたりを身につけてほしいと思います。ただ、僕がつくづく彼らに感心するのは、これからまったくどうなるかわからない世界に、思い切つてとびこんできたという勇氣です。僕らのようにサラリーをもらっている人間からみれば、これは絶対マネできないことですね。



山村啓介氏
朝日放送テレビ制作局制作部、制作係主任。人気番組「笑いの剣」はじめ「落語のこ」プロデューサー。

い芸人を目指す若手がいまですけど、この中で、僕らから言わせると、1組か2組残ればいいという感じ。本社サイドからみたらさらに厳しく、果たして残るものはいらんかとまでいわれてますからね。競争率の激しさといつたら並みのものじゃないですよ。ほんと。NSCにしたって、一種、受験戦争的なムードがありますからね。そういう意味でも、2丁目劇場とは、いわゆる若手の競争の場であり、登龍門的存在といえます。またその逆に、あんまり数が多いので、へんに仲間意識みたいなものが芽生えて、この厳しい状況にありながら競争意識に欠けてしまう面も同時に存在するんですね。このへんが、難しいところですね。

る大半が高校生を中心とした若い子です。彼女らのほとんどが、ワー、キヤー状態で、若よりシビアな面を重視しているというのが事実。でもね、それはそれでいいんじゃないかと僕は思っています。彼ら自身が、それだけではすぐに飽きられるということはわかってますし、そういう気持ちがあったら、成長につながると思います。実際、昨日まで千原兄弟にキヤーキヤーいってた子が、明日になったらもう見向きもしない(笑)なんてこともザラですよ。ま、彼女らにしてみれば、もつとも身近な場所にいる、自分たちのいわゆるダウンタウン的な存在を追い求めているんじゃないか。そういう中で、今の若手がどんな風に育っていくのかが非常に楽しみです。